創刊500号特集

広報「おおだて」創刊からの歩み そして未来への飛翔

歴代市長が語る「おおだて」今昔

現大館市長
畠山　健治郎
（昭和54年～）

昭和二十六年八月に産声を上げた広報「おおだて」も、今号で五百号を数えます。元旦号と併せ、ひとつの節目の意味を込めて特集を組んでみました。

特集第一弾は、歴代市長への広報についてのインタビュー。第二弾では広報の生い立ちからみる過去の出来事を。第三弾は、市民リポーターによる市民の目で見た広報について、をお届けします。

これからも広報をどうぞよろしくお願いします。

市長就任当時の思い出と、そのころの広報の印象はいかがでしたか

市長選に出馬するまではいろいろな事情がありましたし、就任してからは、自分の選択した道ですから責任の重大さを大変感じました。庁内はもとより、どこへ行っても緊張の連続でしたが、周囲の温かい支援と時の流れが、それを解決してくれたように思います。

仕事柄広報に触れることは多かったのですが、印象としては、市民に親しみを持たれるとか、積極的に読みたいと思ってもらえるとかいうには、まだ十分ではなかったような気がしました。

広報の編集方針、広報作りへのアドバイスなどを聞かせてください。

市政の主人公は市民です。刻々と変化する市政の動きを、早く、正確に伝え、市民の声を市政に生かす。これは市政の原点であり、生命線とも言えると考えます。ですから、広報・広聴活動というのを、もっともっと市民と身近なもの、日常生活に溶け込めるようなものにするため、創意と工夫を怠ってはいけません。

常に市民本位を貫き通すこと。広報を見れば、そのまちの基本姿勢がうかがえるともいわれます。そのことを忘れてはならないでしょう。

広報への苦情や提言など、読者からの反応というのはいかがでしょうか

特に反応というのはありませんね。まあ、それはまだ不十分だということでしょう。ただ、広報のつづり表紙は好評なようですから、広報への関心というか、期待みたいなものはうかがえるような気がします。

行政の歩みの中で、思い出を五つほどあげるとすればどんなところでしょう

何もかも毎日が深い思い出というところですが、五つと言われれば、まず清掃会社を複数化して公共料金を据え置いたことです。これは事件性があるとかないとかで騒がれました。次は郷土品まつりを復活させて十年、郷土の良さを見直す機会が定着したこと。市制三十周年で新たな発展を誓い合えたこと。文化会館、長根山運動公園、長木川河川公園、図書館など、都市機能の整備が進んできたこと。そして木材、農業、鉱山といった地場産業が、構造不況に苦しんだことなどでしょうか。

現在の広報をどう思いますか。また今後はどうあるべきとお考えでしょうか

市民リポーターなど、広報の紙面に市民の参加を求めて、一生懸命だというのは喜ばしいことです。

ただ、親しまれる広報になればなるほど、当然のことながらそれに伴う課題も出てくるはずです。現在の紙面、ページでは不足になってくるかもしれませんが、そういったあたりのことも十分大切に考えながら、より好感を持たれる広報作りを心掛けて欲しいですね。

情報化時代が、人間疎外の時代になったのでは大問題です。そうなることのないよう、行政そして広報が、きちんとその使命を果たしていかなければなりません。

次のページへどうぞ